

## 『恋愛論』から『パルムの僧院』へ スタンダールのイタリア

杉本圭子

アルプスの向こうに自らの魂の祖国がある。スタンダールは生涯にわたってそう信じ続けた文学者のひとりである。彼が死後、墓碑銘に「ミラノの人、アリゴ・ペーレ」(アリゴ・ペーレはスタンダールの本名アンリ・ペールのイタリア語表記)と刻ませたほどの熱烈なイタリア礼賛者であったことは、よく知られている。実際、スタンダールは後半生のほとんどの部分を外交官としてかの地で過ごし、ナポレオン戦争からリソルジメントに至る歴史的激動期を、士官として、芸術・音楽に通じたディレッタントとして、そして小説家として、曇りのない目で見つめ、記録し、本国フランスに伝え続けた。本稿では、そうした体験が様々なジャンルの文学作品に昇華されていく過程を、当時のイタリアの情勢、フランスにおけるイタリア観などに照らして概観してみたい。

### イタリアというトボス

古今東西、イタリアに魅せられた文学者は枚挙にいとまがない。この時代のフランスに限ってみても、シャトーブリアン、バルザック、ジュールジュ・サンド、テオフィル・ゴーチエ、アレクサンドル・デュマなど、錚々たる人物たちが一度ならずかの地を訪れている。北部の中心地ミラノ、逸楽の都ヴェネツィア、ルネサンスの文化都市フィレンツェ、カトリックの総本山ローマ、音楽の都ナポリなど、豊かな地域性が旅行者をひきつける。イギリスの貴族の子弟たちの間では長いこと、ヨーロッパ文明の発祥地であり美術品の宝庫であるこの地を訪ねて鑑賞眼を磨くことが、ひとつの通過儀礼となっていたが、その一方でイタリアの諸都市は十六世紀以降経済上の覇権を失い、スベ

イン、フランスやオーストリア帝国など、周辺国からの侵略を絶えず受け続けたことにより、衰退の傾向にあった。ルネサンス期の建物は見るかげもなく荒廃し、街には物乞いがあふれる。当時のイタリアは分裂国家であり、統治体制も共和制、君主制、教皇による統治とさまざまであったが、その全てに共通するある種の後進性。具体的には一部の貴族・僧侶による富と権力の独占、それに伴う政治腐敗、下層民の貧困などは、ヴェオルテルやモンテスキュー、デイドロなど、フランス十八世紀の啓蒙主義者たちの揶揄するところとなっていた。

理性の光に照らしてこの時代のイタリアを眺めてみれば、たしかに前近代的な矛盾ばかりが目につく。その顕著な例がヴェネツィアであった。カーニヴァル、水路に立ち並ぶ黄金の宮殿、夜ごとゴンドラに乗って浮かれ騒ぐ男女、貴族たちの放埒で享樂的な生活。かつての輝きをかるうじてとどめつつも、栄華の陰では売春と貧困とが、デカダンスの臭気を放ちながら徐々に街を蝕んでいる。もつとも、オーストリア領ロンバルディアやパルム公国など一部の地域では、十八世紀半ばごろから開明的な君主や自由主義的な知識人たちの指揮のもと、法律の整備や税制改革をはじめとして小規模ながら社会改革がなされ、一定の成果をあげ始めていた。にもかかわらず、フランスの知識人たちの多くはそうした動きに目をふさぎ、政治、経済、文化、風俗のあらゆる側面において、イタリアの後進性を吹聴した。イタリア人は怠惰で迷信深く、シジスベ（既婚婦人に騎士兼愛

人が寄り添う制度）にみられるような不道徳な風習をいまだに維持している未開の国民である、というような紋切り型が徐々に形成されていく。治安の悪さも有名で、道中で盗賊に出会ったらまずどうすべきか、というようなことが旅行者の間で冗談まじりに語られた。

しかしながら、イタリア女性の美しさ、アリオスト、タッソーの文学、ダ・ヴィンチ、ラファエロ、ミケランジェロの名作、イタリア・オペラの魅力といったイタリアの美点をたたえてやまない人々も一部にはいた。「フェティシズム」という用語の発明者として知られるティジョン高等法院裁判長のシャルル・ド・プロス（一七〇九—一七七七）もそのひとりである。もつとも彼らには世論に逆らおうとする論争的な意図はなく、むしろ革命以前の法服貴族の鷹揚なディレッタンティズムを体現しているといったほうがよいだろう。

イタリア絵画・音楽の紹介者として一八一四年に文壇に登場した若きスタンダールは、この相対立する二つの見方を十分に理解していた。彼はイタリアに対して特に手厳しかったイギリス人旅行者たちの著作、およびその影響の下にイタリアをこきおろしたフランス人の著作、そしてのちに座右の書となったド・プロスの『イタリア便り』（一七九九）にも通曉していたからである。そのうえで自他ともに認める親伊派としてふるまうことが当時どのような意味を持っていたかは、後年のメリメの証言に明らかである。「芸術や文学に関する彼「スタン

「ダール」の見解は、大胆な邪説とみなされた。(……)彼がモーツァルト、チマローザ、ロッシーニらを我々の国の若い喜歌劇作者たちより高く評価したときには、たいへんな騒ぎになった。フランス人の心を持っていない、と人は彼のことを責め立てたのである。『フランス大革命に続く諸外国との戦争を通じて大いに士気が高揚していたところに、ナポレオンの失墜とウイーン会議での屈辱がフランス人の愛国心に火をつける。このような状況の下で、文化的に遅れているのはむしろフランス人のほうであると声高に主張することは、復讐心に燃える国民にとって挑発行為以外のなにものでもない。

しかし、彼とて何の根拠もなく同国人たちを刺激しようとしたわけではない。彼の鑑識眼はれっきとした実体験によつて培われたものである。弱冠十七歳のアンリ・ペールがはじめてイタリアの地を踏んだのは一八〇一年、ナポレオンの第二次イタリア遠征軍の一兵卒としてであった。このときノヴァラでチマローザのオペラ『秘密の結婚』を見て一種の啓示を受け、ミラノで壮麗な建築、名画に触れ、人妻に恋するという決定的な体験をしている。その後何度かの滞在を経て、ナポレオンの没落(一八一四)とともに公務員の職を失つと、パリで貧窮生活に甘んじるよりも憧れの街ミラノでつましく暮らすことを選ぶ。だが、新生活は順風満帆というわけにはいかなかった。くだんの人妻にはあつさりと思切られ、イタリア・ロマンティチズムの存在を彼に教えたミラノの自由主義者、文士たちのサークル

には、見解の相違から完全には受け入れられず、それどころかあらぬスパイの容疑をかけられる。ただし、彼の芸術的素養はこの時期に形作られたといつてよい。イタリア滞在中に『イタリア絵画史』(一八一七)、および実際の旅日記をもとにした架空の旅日記『一八一七年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』を発表。官憲によつてミラノを追われ、パリに戻つてから矢継ぎ早に『ロッシーニ伝』(一八二四)、『ローマ散歩』(一八二九)を出版し、イタリア通のジャーナリストとして身をたてられるまでになつたのも、夜ごとスカラ座に足繁く通い、モーツァルトやロッシーニなどの巨匠から今となつては名も残らぬ群小作曲家の作品に至るまで、歌詞を見ながら節が浮かんでくるようになるまで繰り返し鑑賞し、また地元の名士のサロンにしばしば顔を出して情報収集に励んだ結果であつた。スタンダールにとつて生涯最大の片思いの相手となつたもうひとりの人妻、マチルド・デンボウスキとの交渉からは、比較文明論をベースにした恋愛心理解剖の書、『恋愛論』(一八二二)が生まれた。

そして何よりも、イタリアは彼にとつて特別な思い入れのある国であつた。後年の自伝『アンリ・ブリュラーの生涯』によれば、グルノーブル生まれのアンリ少年は、伯母から母方の家系が「プロヴァンスよりもなおはるかに美しいある国の出身」であると聞かされたことがあり、幼少時に失つた母親への愛惜の念もあいまつて、この全く根拠のない説をもとに大いに想像力をたくましくしていた。『グアダニ』(Quadragni)またはグ

アダニアーモ(Guadagnano)というひとりの人物が、イタリアで何か小さな殺人でも犯して、一六五〇年ごろ、法王の特派使節のような者について、アヴィニヨンへやって来た<sup>2</sup>、それが母方の家系ガニオン(Gagnon)家のルーツであると。そこは亡き母も読んでいたタンテの祖国、「オレンジの木が地面にじかに育つような<sup>3</sup>」楽園である。まるで冗談のようなりとめもない考えだが、本人は大まじめである。「生粋のドーフィネ人<sup>4</sup>(ずる賢いとされている)であった弁護士<sup>5</sup>の父親の束縛を嫌い、父方の血をあくまで否認しようとしたアンリ少年にとって、イタリアの血は、自らのアイデンティティを確保するために不可欠なフィクションだったのである。

### 恋愛の祖国

「イタリアは精神面がいちばん知られていない国のひとつである<sup>4</sup>」と、スタンダールは「一八一七年のローマ、ナポリ、フィレンツェ」の中で述べている。実際、従来の旅行記作家たちは古代遺跡、芸術品の宝庫としてのイタリアにばかり注目し、それを紹介することに労力を割いてきた。その種の情報もまたスタンダールの旅行記の大きな売りのひとつであったことは事実だが、彼はそのさらに先へ行くこととする。彼の本に各地の有力者のサロンの情景、またそこで聞きかじったイタリアの風俗についての考察や逸話などが多く書きこまれているのも、イタ

リアの生きた現実を精彩豊かに描き出そうとする配慮によるものであった。

そこには命を賭してまで恋愛にかける情熱的な人々の姿が禁欲的かつ緊迫感のある文体で描かれており、『恋愛論』の中の恋愛の四分類のうち、スタンダールが唯一「真実の恋愛と認める」「情熱恋愛」の例がふんだんにもりこまれている。不実なフランス士官の愛人を、自ら男装して決闘で撃ち倒す女、一夜の幸福を永遠のものとするために、そうとは知らぬ愛人を道連れに無理心中をはかる女、不貞をはたらいた妻を数年にわたって幽閉し、死に追いやる夫。それは『恋愛論』の中の語句を用いれば、「恋」という「甘い花」を、「恐ろしい断崖の縁まで行って摘む<sup>7</sup>」ことを恐れぬ希有な国民の姿である。彼らにとつて、情熱を抱くこと、瞬時の衝動に従って行動することは、少しも滑稽なことではない。ヨーロッパ中の人々のうらやむ社交界を発展させたフランス人は、名誉欲や虚栄心にとらわれ、もはやそのような思い切った行動に出ることはできない。実際、「パリで恋愛を見つつけよ」と思えば、教育と虚栄心がなく、さし迫った必要との闘争のためにおエネルギーを残している階級まで下っていくほかはない。フランシユ・コンテの材木商の息子、ジュリアン・ソレルの波乱万丈の物語はスタンダールのこつした確信から生まれるのであるが、その意味でイタリアは恋愛を忘れたヨーロッパ人にとつてのアルカディアなのである。

このようにスタンダールがイタリアの習俗を描くとき、つねに恋愛に特権的な地位が与えられているわけだが、その際これを他の要素、すなわち国民性、気質や政体などのかかわりにおいて論じる配慮がなされていることに注目すべきである。これは恋愛という「一種の狂気についての正確な科学的な記述」<sup>10</sup>を企図した『恋愛論』においていつそう顕著な傾向である。すなわち著者によれば、主体がヒポクラテスの時代から言い継がれてきた体液のどの型に属するかによって、その恋愛の形態に影響が生じるはずである。「多血質」のフランス人、「胆汁質」のスペイン人、「憂鬱質」のドイツ人、「粘液質」のオランダ人の恋愛は、それぞれ異なった色合いを帯びる<sup>11</sup>。こうした生得的な要素に政体などの外的な要因を考え合わせると、さらにいくつかの類型が生じる。たとえばイギリスのような「憲章の仮面をかぶった貴族制」<sup>12</sup>の国では、妻たちは羞恥心を美德とし、あらゆる点において卑俗に墮さぬよう細心の注意を払うことで、夫の自尊心を満たすよう努めなければならない、と論される。またアメリカ合衆国のような共和政体下において、市民は政府によってほぼ無条件に自由を与えられるため、抑圧的な政府との闘いをつねに余儀なくされているヨーロッパとは対照的に、個人の感受性や情熱は死に絶え、また一方でプロテスタンティズムの影響のもと、冷やかな理性が支配する<sup>13</sup>。いずれの国においても恋愛は育たない。

ではイタリアはどうか。中世共和国都市の伝統が、君主制を

支える原理である「名誉心」に歯止めをかけ、他人の目を気にすることなく自由に幸福に身をまかせられる土壌を形成する。しかもここには「すばらしい青空の下で落着いた閑暇」があり、それは「あらゆる形の美に対し敏感にさせ」<sup>14</sup>、恋愛の発生を促す。こうして、著者の次のような見解にいちおうの客観的根拠が与えられることになる。「現在ヨーロッパの風習においては、これは私の描かんとする植物」すなわち恋愛「が自由に育つ唯一の国である」<sup>15</sup>。同時に、とかく不道徳なイメーヂをもつて語られることの多かった自由恋愛の国イタリアという紋切り型が、価値観の転倒によって、まぎれもない美質として提示される。

### 政治と恋愛

ただし、スタンダールは一八一七年にこうも書いている。

「われわれを巻きこんでいる大きな変革のただなかでは、もはや政治のなかに陥らずに、一国民の習俗を研究することはできない」<sup>16</sup>。実際、『一八一七年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』は、しばしばナポレオン失脚後、ウィーン体制下のイタリアについての政治風刺の書と見なされる。とくに注目すべきはナポレオンのイタリア支配をめぐる解釈である。イタリア史においては、ナポレオンはオーストリア、ハプスブルグ家の支配からイタリアを解放する一方で、その後の分割統治と独裁体

制によつて結果的にイタリアの統一と近代化を阻んだ圧制者とみなされることが多い。一方、一八〇〇年にナポレオン軍の士官としてアルプスを越え、ミラノに入城したスタンダールにとつて、若きボナパルト將軍はなによりも長年にわたる隷屬状態により眠っていたイタリア人の精神を呼び覚まし、自由主義の種をまいた英雄である。外国軍の侵略が一国民のアイデンティティを脅かすどころか、その本来の性質を開花させるという歴史の通念を破る図式を、スタンダールは大胆にも提示してみせる。こうした見解は晩年に書かれた『パルムの僧院』（一八三九）の冒頭において詩的結末をみる。

「……」 まもなく新しい情熱的な風習が起つた。一七九六年五月二十五日「ナポレオンのミラノ入城の日」人民は、みなこれまで尊敬していたものがすべてこのうえもなく滑稽であり、どうかすると汚らわしいということに悟つた。オーストリアの最後の連隊が退散するとともに、古い思想は地に墮ちた。命を賭けることが流行りだした。幾世紀の気の抜けた感情のあとで、今や幸福になるためには眞の愛をもつて祖国を愛し、英雄的な行為を求めねばならないことを知つた。長く続いたカルル五世とフィリップ二世の嫉妬深い専制主義のおかげで、人民は深い夜に沈んでいた。銅像をひっくり返した。するとたちまち彼らは光を浴びるのを感じた<sup>17</sup>。

主人公のファブリス・デル・ドンゴは、まさにこのフランスとイタリアとの歴史的な出会いから生まれた、情熱的な人物である<sup>18</sup>。故郷の湖の上をバリの方角に向かつて飛ぶ鷺の姿、それはナポレオンの象徴である。に触発されてワートルローの戦場に駆けつけ、パルムに戻ると芝居小屋の女優に横恋慕し、その愛人を刺し殺したかどで投獄され、そこで獄吏の娘、クレリア・コンチに恋する。自分というものを明確に意識することのないこの奔放な青年をめぐつて、バルザックをも感嘆せしめたドラマチックな政治劇が繰り広げられるのだが、この物語はいったん開放されたエネルギーが復古体制によつて再び抑圧されたとき、いつそこの激しさをもつて噴出せずにはおかないことを如実に示している<sup>19</sup>。近親相姦的な愛情をファブリスに注ぐ叔母のサンセヴェリーナ公爵夫人は、公国の宰相モスカ伯爵の愛人となり宮廷を意のままに操っていたのだが、獄中の甥を救うため、おたずね者の共和主義者のフェランテ・バラを使つて、暴君を毒殺させるに至る。しかし当のファブリスはそんな叔母の悲痛な思いをよそに、獄中で毒殺される危険も顧みず、脱獄のち、再びクレリアのいる監獄に戻っていく。ところがその間にクレリアは、ファブリスを救うために父親を裏切つた罪悪感から、もう二度と恋人には会わないと聖母に誓いをたてていた……。

スタンダール自身、イタリアの政治的後進性は十分に理解し

ており、イタリア人が自らの手で三世紀にわたる専制政治に終止符を打ち、自由を勝ちとるまでにはまだ相当な時間がかかるであろうことを、漠然と感じていた。「イタリアの青年たちのあいだでは無知、怠惰、享樂があまりに甚だしいので」、イギリスのような「二院制の水準に達するまでには、長年月が必要である。」そしてそのときになってようやく「まがいものの文化と御用文学」にかわる国民的な「文学」が生まれるであろうと、『ローマ、ナポリ、フィレンツェ（一八二六）』の中で述べている。<sup>20</sup> 実際、民族の自立や立憲政治の確立を求める炭焼党員（カルボナリー）による反政府運動は、一八二〇年代以降ナポリ、シチリア、ピエモンテ、モデナなど各地で散発的に起こっていたが、民衆の離反や内部分裂などにより、また諸外国の支援が得られなかったこともあって、いずれもオーストリア当局に鎮圧された。その一部始終をスタンダールは苛立ちとある種の諦念をもって眺めていたのであり、フェランテを含め、この時期の彼の小説に登場するカルボナリーの闘士たちが極端なヒロイズムに走るのも、そのフラストレーションのなせるわざかもしれない。

しかも本作品を執筆する際に彼の念頭にあったのは、ローマで入手した十七世紀の古いイタリア語の写本に含まれていた『ファルネーゼ家隆盛の起源』という、ルネサンス期の恋と残酷の物語であった。その中でファルネーゼ一門の美女ヴァンドゥツァは枢機卿の愛人となり、溺愛する甥アレックスandro・

ファルネーゼを僧侶、ついで教皇とすることに成功する。それは恋愛が人生において今よりもずっと大きな位置を占めており、「命を落とした男をあわれむ前に、その男が（恋愛によって）どれほどの幸福を味わったかを知ろうとした」時代の、スキャンダラスな陰謀劇であった。スタンダールは話の舞台を現代に移すことにより、「節度」および「偽善」とひきかえに情熱を失ってしまった十九世紀の文明、とりわけフランス的な「高德と優雅」に一石を投じること成功する。が、一方でこのインモラルともいえる物語を出版するにあたって、この時代の小説家の例にもれず、作者は予防線を張ることを怠らない。現代の読者に対しては、物語があくまで過去の時代のものであることを序文で強調し、少しでも道徳上の非難をかわそうとする。そして表向き、登場人物たちの行状に「峻烈な道徳的非難を浴びせる」ポーズをとりつつ<sup>21</sup>、最終的にはすぐれてイタリア的なるものに軍配を上げるのである。それは過去の英雄的な時代に対するノスタルジーに裏打ちされた、作者による近代批判の所作といえよう。

### アルプスの北と南

社交界の欠如がイタリア人の自然なふるまいを生み、専制体制がかえって人々のエネルギーを解き放つことにつながったように、しばしばイタリア人の短所として挙げられる極度の信心、

迷信深さもまた、逆説的にはあるが、情熱的な風俗を開花させる原動力となる。ある意味で、『パルムの僧院』はイタリアの前近代の要素こそが可能にした愛の物語であるといつてもよい。

歴代のイタリア旅行記と同様、スタンダールの旅行記にも、聖ジェンナーロの血の入った聖遺物箱、聖女フリギッタに語りかけたという十字架像など、奇蹟や民間信仰にまつわるエピソードが数多く登場する。<sup>23</sup> いかに進歩的な思想の持ち主であつても、イタリア人である限り、幼時からすりこまれたこの種の信仰には抗いがたい、と著者は言う。実際、ファブリスは小さいころ恩師のブラネス神父によつて植えつけられた占星術および前兆への信仰を生涯保ち続けるのであり、二度にわたる牢獄生活、無辜の人（パルム大公）をあやめての脱獄、修道院での晩年と、師の予言が成就することを恐れる一方で、無意識のうちにそれに導かれていく。一方、修道院育ちのクレリアは内心の平静を何よりも尊ぶ信仰深い娘であり、恋人のために父親を裏切ったことを激しく後悔し、もはや恋人のことを「決して見ない」と聖母マリアに誓つたあと、父の定めた婚約者との結婚を承諾する。が、時を同じくして僧侶となつたファブリスと人妻となつたクレリアが結ばれるのは、まさに彼女がこの誓いを詭弁に近いやり方で守り通すことによつてであつた。ファブリスの北側ではきつと奇妙に思われるだろうが、彼女は過ちを犯しながら、誓いは守つていたのである。<sup>24</sup>「すなわち、相

手の姿を見ること、ができ、ない夜のあいだけ恋人を迎え入れるというやり方で。

しかし、ふたりがその愛の証である息子サンドリーノを失つのも、誓いを破つたことが原因であつた。息子をわがものにしたというファブリスの気まぐれから、表向き病気を装つていゝうちに本当に病気になるつてしまつた息子の枕元で、クレリアはるつそくの光に照らされた恋人の顔をたびたび見、白昼幾度か恋に我を忘れたのである。息子は死に、クレリアはこの試練を自分の過ちに対する天罰として受け入れ、あとを追うようにしてファブリスの腕の中で息をひきとる。そしてパルムにある僧院に隠遁したファブリスもまた、一年のちに世を去る。

ここでは、ヨーロッパの他の文化圏においてはマイナスの刻印を押されがちな要素が、曖昧で両義的な価値を帯び、物語にロマネスクな枠組を与えている。非合理的なもの、原初的なものがその愚かしさゆえに崇高さを獲得する。それを可能にするのがイタリアという土壌であり、元来無神論者で、明晰ならざるものを嫌悪した著者もまた、土地の精に導かれるままに、この神話的な物語に加担するのである。

ところでスタンダールが『パルムの僧院』を書いたのはイタリアではなく、ローマの外港、チヴィタ・ヴェッキアに領事として着任して七年余りがたち、持病を理由に長期休暇を申請してパリに滞在中のことだつた。なんといつても、彼にはパリの洗練された文化と社交界が必要であつた。あれほどイタリアに



恋焦がれていた彼が、「もう太陽は見飽きた」と言うのである。五十代にさしかかり、知り合いとてないへんぴな港町に取り残されたスタンダールの孤独と無聊がいかに深かったか、察せられよう。書くことだけが慰めになった。注目すべきは、この作家がしばしばイタリアではフランスのことを、逆にフランスではイタリアのことを書いていたことである。七月王政期のフランスを舞台とする『リュシヤン・ルーヴェン』、『ラミエル』(いずれも未完の小説)はいずれもチヴィタ・ヴェッキアで書かれ、逆にそれ以前の『恋愛論』やイタリア旅行記はパリで書かれた。イタリアでは故国フランスのことを想い、フランスでは遠いイタリアのことを想う。今いる場所にはないものを求める、人間の普遍的な心理のみによるものだろうか。

「文明の完成は十九世紀のあらゆる繊細な快楽にもっとも頻繁な危険の存在を結びつけることにあるかもしれない<sup>26</sup>。」「恋愛論」のこの一節が、スタンダールの価値観を端的に示しているといえよう。すなわち彼はフランス文化の誇る「繊細な快楽」と、イタリアというトポスが差し出す「もっとも頻繁な危険」をともに深く愛し、アルプスを隔てて対峙するこの二つの異質な文明に優劣をつけることなく、創作を通じて両者を融和させようと試みたのである。よくよく読んでみれば、ミシエル・クルゼが指摘するように、純粹にイタリア的に見えるものの中にもフランス的なものが入りこんでおり、逆もまたありうるといふことがわかる<sup>26</sup>。例えば『パルムの僧院』においては、

イタリアの若いエネルギーがフランス軍の司令官、ボナパルト・ナポレオンの侵攻を触媒として噴出したように、パルム大公の宮廷はサンセヴェリーナ公爵夫人の愛嬌と才氣を得てはじめて華やぐ。夫人の活発で陽気な気性と、逆境をはねかえし、自ら運をきりひらく強靱な意志、受けた侮辱に対しては猛猛なほどの容赦のなさを発揮する情熱的な性格は、イタリア・ルネサンスの魂そのものであるが、同時にその才気煥発ぶりと巧みな会話術は、革命以前のフランスのサロン文化の遺産でもある。実際、パルムの宮廷の描写に、サン・シモン公爵の『回想記』中のルイ十四世の宮廷でのエピソードの影響がみられることは長いこと指摘されてきた。政治理念の上ではフランス革命を支持していたスタンダールも、「平等」の名のもとに洗練された趣味をそなえた旧特権階級の人々が社会の片隅に追いやられ、無教養なブルジョワが幅をきかせ始めるさまを遺憾の念をもって眺めていた。

「パリはその文学と会話がすぐれている点で、現在も未来もヨーロッパのサロンとしてとどまるだろう<sup>27</sup>。」「イタリアのサロンではフランス的機知は居場所がない<sup>28</sup>。」「イタリア人はその機知によってよりもその魂によって生きている<sup>29</sup>。」「パルムの僧院」以前の作品にみられる、文化的相対主義にのっとったこれらの考察は、父親の暗殺犯(フェランテ・パラ)を追い詰めようとするラヌッチオ・エルネスト大公の企てを、ラ・フォンテーヌの「庭造りと領主」の寓話を用いて揶揄し、最終的に

は翻意させる、公爵夫人の見事な術策によって乗り越えられる<sup>30</sup>。このときイタリア的なるものは、おのが長所にフランス文化の精髓ともいうべき要素を接いでもまず豊かさを増し、両者を隔てる国境の存在をも相対化する。革命の世紀を通じて、祖国と「魂の祖国」との間で生涯揺れ続けたスタンダールの姿を、『バルムの僧院』は鮮やかに凝縮して見せているといえよう。

- 1 十八世紀以前のフランス人のイタリア観については、たとえば次の研究書を参照のこと。Hermann Harder, *Le Président de Brosses et le voyage en Italie au dix-huitième siècle*, Genève, Slatkine, 1981.
- 2 Prosper Mérimée, 'H.B.' (1850) dans *Stendhal, mémoire de la critique*, Paris, Presses de l'Université de Paris-Sorbonne, 1996, p.289.
- 3 『マンリ・プリユラルの生涯』第八章、六一―六三頁。翻訳は『スタンダール全集』第七巻、桑原武夫・生島遼一訳（一九六八、人文書院）を使用した。
- 4 『一八一七年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』（邦題『イタリア紀行』、白田紘訳、新評論、一九九〇）、二〇九頁。
- 5 それ以外に「趣味恋愛」「肉体的恋愛」「虚栄恋愛」の三つのタイプの恋愛が挙げられている（『恋愛論』、大岡昇平訳、

新潮文庫、第一章、一〇頁）。

- 6 それぞれ『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』（一八二六）（邦題『イタリア旅日記』、白田紘訳、新評論、一九九一―一九九二）、第一巻一九五―一九六頁、第二巻一九五―一九六頁、第一巻二二四―二二五頁を参照のこと。
- 7 『恋愛論』第四章、一五一頁。
- 8 同右、一五〇頁。
- 9 スタンダールは若いころ十八世紀の思想家の著作を読みあさっており、気質の理論についてはデステュット・ド・トラシーとならぶイデオログの中心的人物で医師でもあった、カバニスから学んでいる。また、気候や地理的条件、生活様式、政体、宗教といった自然のおよび精神的な諸条件のもとに社会的事象を考察するという相対主義の視点は、モンテスキュー（『ペルシャ人の手紙』、『ローマ人盛衰起源論』、『法の精神』）、およびその影響を受けたスタール夫人（『文学論』）、シスモンド・ド・シスモンディ（『ヨーロッパ南方法学』）などを通じて吸収した。
- 10 『恋愛論』補遺、「序文」（一八二六）、三五二頁。
- 11 同右、第四〇章、一四六頁。
- 12 同右、一四七頁。
- 13 同右、第五〇章、一八七―一八九頁。
- 14 同右、第四三章、一五七頁。
- 15 同右、第四〇章、一四八頁。
- 16 『イタリア紀行』、二〇九頁。

17 『パルムの僧院』(大岡昇平訳、新潮文庫)、第一巻、第一章、十一頁。

18 ファブリスがテル・ドンゴ侯爵の實の息子ではなく、母親であるテル・ドンゴ侯爵夫人とナボレオン軍の將校との間にできた子であることが、行間にほのめかされている。

19 後述するように、『パルムの僧院』は十六世紀のイタリアの古文書をスタンダールが自由にアレンジして書き上げた作品であるが、作者がこの架空の物語の舞台をパルムに定めるにあたって、実際はハプスブルク家の支配のもと、ナボレオン時代の体制が大筋において維持されたパルム公国ではなく、極端な反動政治の行われたモデナ公国のほうを念頭に置いていたという主張が、フランス人研究者のあいだで有力となっている。

20 『イタリア旅日記』第一巻、一三三頁。

21 *La Chartreuse de Parme*, Appendice I dans *Romans et nouvelles* II, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade<sup>®</sup>, p.505. スタンダールが古文書の抜粋を筆写した際、前書きのようなものをつけた。その中の一節である。

22 『パルムの僧院』第一巻、「緒言」、五、六頁。

23 それぞれ『ローマ散歩』第一巻、六一、六二頁、一五二―一五六頁を参照。

24 『パルムの僧院』第二巻、第十八章、三三七頁。

25 『恋愛論』第四章、一五一頁。

26 Michel Couzet, *La Chartreuse de Parme, roman de l'esprit*

dans *Le Roman stendhalien: La Chartreuse de Parme*, Orléans, Paradigme, 1996, p.99–135.

27 『恋愛論』第四章、一五三頁。

28 『イタリア旅日記』第二巻、二八頁。

29 同右。

30 『パルムの僧院』第二巻、第二十四章、一三九―二四二頁。